

talk! talk! talk! NPO法人パラフォト代表・佐々木延江さん



NPO法人パラフォト代表 佐々木延江さん

2006年3月、トリノで行われたパラリンピック。日本チームの結果をご存じだろうか？ 障害者スポーツは「ハンデを乗り越える」部分に注目が集まるため、実際にスポーツとして魅力を感じている人は少ないのではないだろうか。NPO法人パラフォト代表・佐々木延江さんはシドニーパラリンピック以来、障害者スポーツの魅力を写真を通して伝える活動を行っている。「障害者スポーツは障害のない人のスポーツとなら変わらない楽しさと感動がある」という佐々木さんに、トリノで撮影された写真をご紹介します。その活動についてうかがった。

プロフィール

ささき・のぶえ。1970年、横浜生まれ。グラフィックデザイナーとして厚木市の広報誌を作っていたときにパラリンピック・アルペン日本代表の選手と出会ったのをきっかけに、障害者スポーツに興味を持つ。2000年、シドニーのパラリンピックから任意団体としてパラフォトを設立。シドニーの写真インターネットのホームページで配信する。2001年、NPO法人、国際障害者スポーツ写真連絡協議会（通称パラフォト）を設立。パラリンピックだけでなく、様々な国内外の障害者スポーツ取材し、多くの人に知ってもらい、伝える活動を行っている。トリノでは企画責任者・編集サポートとして現地に入り、取材を行った。佐々木さんとそのメンバーの撮影した写真や記事はパラフォトのサイトに掲載されている。

シドニーから写真をネット配信 パラリンピックをいち早く伝えたメディア

パラフォトではどのような活動をされているのでしょうか。

4年に2回ある夏と冬のパラリンピックや、国内外で行われているその他の障害者スポーツの大会を取材し、現地からインターネットで配信しています。あまりなじみのない障害者スポーツを知り、多くの人に伝えていこうということで活動を行っています。

障害者スポーツを伝えるという目的で活動されているんですね。そもそも、パラフォトを立ち上げられたきっかけはなんだったのでしょうか？

2000年にシドニーで行われたパラリンピックがきっかけです。もともと私はグラフィックデザインの仕事をしていたので、当時コンピューターのエンジニアと2人でチームを組んでコンテンツの開発の仕事をしていました。そこに、以前仕事で知り合った長年パラリンピック取材していたフォトグラファーさんがいらっちゃって、「シドニーで撮ったパラリンピックの写真をインターネットで配信できないだろうか」という話をいただいたんです。

当時はまだ、一般の家庭ではモデムを繋いでインターネットを見ているような環境ですから、今のように回線の状態が悪くなく、ホームページに写真を載せるのは重たいのでやめてくださいと言われるような時代だったんです。でも、そういう時期に誰もやっていないからこそ面白いアイデアなのではないかと思いついて、やってみようということになりました。

環境が悪い中でも、わざわざ見てくれる人がいるかもしれないと思われた？

ええ。障害者スポーツは今よりも注目度が低くて、リアルタイムで情報を伝えている所は少なかったですし、今のように結果がインターネットの速報で出ることもありませんでした。だから、情報として必要としてくれる人がいるのではないかと思います。実際、夏の大会だったということもあって、2週間で10万件くらいのアクセスがあったんですよ。NHKなど他のメディアからも問い合わせが来たりして、かなりの手ごたえ、反応を感じました。

成功だったんですね。

それがそうでもなくて、現地に入ったスタッフにとっても負担がかかってしまったんです。まだデジタルカメラではなくフィルムカメラでしたから、撮って現像して、選んでスキャンして送ってという作業があって、ほとんど寝る時間もないわけですよ。それに旅費以外は自己負担でしたし、現地へ行ったメンバーが帰ってきて「大変だった！」って相当怒っていましたね。でも同時に「この活動はぜひ続けるべきだ」と、怒りながら言ってくれました（笑）。最初だから仕方がなかった部分もありました。でも次のソルトレークに向けて、どうしたらもっとスムーズにみんなが楽しんでできるのかを考えなければいけないと思いました。それをきっかけに、どうせやるなら、いろんな人の、いろんな経験でパラリンピックに光をあててみたい、ということで、NPO法人という形で活動を始めたんです。

ライター、フォトグラファーの目線そのままに 現場で感じたことをそのまま記事にする

活動の目的は、自分たち自身も障害者スポーツを知りたい、知り得たことを知らせたいということで、ビジネスとしてもうけを考えてやっていくことはどうしても無理でした。それで、2001年のソルトレークシティの時には将来メディア関係の職に就きたいという大学生や、スポーツライティングをめざして活動しているライターさんを連れて取材・編集チームで現地へ行きました。自分の将来のために役立てばという気持ちで行っていたので、みんな前向きで、前回は落ちて取材することができませんでした。ただ、プロのフォトグラファーさんの協力が得られず写真はあまりいいものが撮れなかったんです。ソルトレークは写真が少ないサイトになってしまいました。

現在も協力してくれるボランティアの方を中心に取材を行っているのですか？

はい。アテネ、トリノと回数を重ねるごとに多くの方が、いろいろ考えながら参加してくださるようになって、良い取材体制がとれるようになってきました。今回のトリノでは、これまで一緒に取材してきた方をはじめ、現地でフォトグラファーとして活躍している方、ツバルという国で障害児教育のボランティアをしている方もいました。また、トリノのアルペンで金メダル1個と銀メダル2個を獲得した大日向選手の旦那さんが、今回フォトグラファーとして参加してくれました。彼はスキー雑誌の編集者でもあり、スキーの写真が大変上手な方なのです。その他にも国内外のアマチュアスポーツを撮影しているフォトグラファーや、自分の住んでいる地域の障害者スポーツをライフワークで取材しているフォトグラファーなど、本当にいろいろな方が参加してくれました。おかげで、今回の冬のパラリンピックは全部で4競技あるんですが、日本人の出場する3競技については全ての競技に2人ずつ付いて取材することができたんです。通常、新聞社の方でも2人くらいで全ての競技を取材をしていましたが、人数がちょうどよく守備範囲を決めて取材できたことは、今回は本当に幸運なことだったなと思います。



金銭的なリスクなどもある中で、それだけのボランティアの方が参加されているのはすごいことだと思います。

そうですね。やはり、パラリンピック報道に実費で参加するというのは普通では考えられないですからね。特殊なことだと思っています。相当スポーツ写真が好きか、または自己投資なんです。たとえばこれからスポーツのフォトグラファーとしてやって行くという強い意志があって、その上、障害者スポーツという未知の分野に挑み、これをきっかけに売り込もうと考えているかもしれない。金銭面でいうと、写真の学校に入ろうというくらいの意気込みがあるわけです。もちろん、パラリンピック・ファンであって、それだけ高いモチベーションを持っていないと参加できないと思います。

そういう気持は写真や記事に表れるものだと思います。選手が競技をするのと比べてはいけないのかもしれないけれど、こちら側も勝負をしているのと思うんです。自分がどれだけの取材ができるか、撮影ができるか、その結果は撮影者本人がよくわかると思います。これは自分にとっての金メダルだって。

いわゆるプロではない方もいらっしゃる中で、メディアとして情報を伝えていく上で気をつけていることはなんですか？

障害者スポーツはみなさんが思っている以上にハイレベルの戦いをしています。障害者が戦っているという部分は不可分ですが、その上で、スポーツとしてのレベルの高さ、面白さを感じることができます。現場で感じた感動をどう伝えれば説得力を持って読者に伝えられるのか、勉強したり実験をしたりと試行錯誤はしていますが、一番大切なのは、そのときの感情を素直に撮れることだと思います。現場で思ったこと、感じたことを、その人の言葉でありのままに伝えてもらおうと思っています。

そういう意味でも、取材する人の熱意、どれだけ取材対象を好きか、興味を持っているかというのが、いいコンテンツにするためにとても重要なんです。



野島弘選手と森井大樹選手を取材する佐々木さん
撮影：山口ミカ



トリノ市内のカフェで記事を配信 撮影：大石智久

障害者スポーツの楽しさ、面白さ その感動を伝えるには写真が一番

佐々木さんが障害者スポーツについて一番伝えたいこととは何ですか？

障害者であれ非障害者であれ、スポーツはなかなか楽しく、面白く、やる人も観る人も成長し、お互いのためになるものなんじゃないかということです。

「障害者スポーツ」というと、「パラリンピック」だけ、もしくは、障害者のふれあいスポーツ大会などのレクリエーション、またはリハビリの延長のように思われているかもしれませんが、じつにいろいろな関わり方があるんです。競技の世界でトップのレベルになると、もう本当にプロフェッショナルというか、ハイレベルな戦いをしているんです。驚きや感動、興奮があって、とても魅力的なんです。

でも、興味のない人に面白くから見てと言っても、関心のないものに関心を持ってと言ってもなかなか難しいですね。そういった人にこそ振り向いてもらいたい。そのために一番効果的なのが写真だと思っています。

写真ですか？



大回転 女子座位／優勝、大日方邦子選手
撮影：堀切功

障害者スポーツは人間そのものの生き方や可能性にさまざまな投げかけをしてくれるモチーフです。そこに感動し、そのまま伝えてくれるカメラマンとその写真の力が重要だと思うんです。押し付けがましくなく、見た人に感動を与えてくれるものだと思います。そこから自然に興味を持ってもらえたらと思うんです。そういう思いも込めて、サイトにはたくさん写真を掲載していますし、パラリンピックの期間中、配信された写真がリアルタイムで増えていく写真展なども行いました。今回は全国9か所で行いました。現地からインターネットで各写真展会場へ作品データを送り、会場ではそれをダウンロードし、写真用の高解像度プリンターでその都度出力してパネルに貼り展示します。各会場では、写真展会場そのものがパラリンピックの応援イベントとして話題を呼ぶような工夫をしていましたので、会場ごとに違った形で競技の魅力が空間に表現されていました。

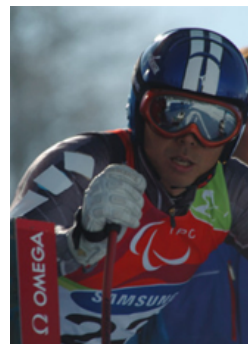
実は私自身、1枚の写真の魅力が障害者スポーツが好きになったんです。もともと、障害者スポーツを知るところからスポーツの楽しささえ知らなかったんです。体育の授業が憂鬱なタイプで(笑)。ちょうど長野オリンピックの前、仕事で行政の広報誌を作っていました、その取材で長野パラリンピックのアルペン代表選手と会う機会があったんです。

その頃パラリンピックについては？

まったく知らない状態で、「会わなくちゃいけない」くらいの気持ちでした。1本足のスキーヤーだと聞いて障害のことがばかりが頭を悩ませてしまって、どう接していいのか、何を聞いていいのかかわからない状態でした。どうしよう、どうしようってとても緊張していたら、選手が「僕が滑っている写真を見ますか？」と言ってくださったんです。それが青い空に白い雪、1本足で滑っているもので。その写真を見たときに、「あ、この人はスポーツ選手なんだ」って気づいて、取材を進めることができたんです。

その写真が魅力的だったんですね。

はい。リハビリでも健康やレクリエーションのための一環でもなくて、一流のスポーツ選手が競技をしている姿だと思ったんです。レベルが高いものだとすぐわかりました。とにかく魅力的で.....まあ要するに、とてもカッコよかったんですね(笑)。私はそれから障害者スポーツに興味を持つようになったんです。



ジャイアントスラローム男子立位
/スタート直前の東海将彦選手
撮影：堀切功

ソルトレークシティからトリノへ 日本チームの大躍進！

トリノでは今年、多くのメダルを獲得し、日本人選手の活躍が目立っていましたね。

ソルトレークシティでの失敗を見てきましたから、本当にうれしいですね。日本が強くなった、そう肌で感じた大会でした。

特に今回は、ルールが変わってよりメダルを取るのが難しくなりました。前回まではひとつの種目でも障害の度合いによってクラスごとに分かれていて、それぞれクラスごとにメダルがありました。アルペンなら20クラスくらいに分かれていて、たとえば今回メダルを取った大日向選手が出ていたクラスは4人が出て、そのうち3人がメダルを取っていた状況ですから手放して喜んでいいの疑問でした。でも今回からは分かれるのは3クラスだけ、あとはそれぞれの障害のハンデを計算してタイムが出るようになったんです。メダルの数がぐんと減った中でこの成績ですから、すごい成長だと思います。

ソルトレークシティでは銅3個だったメダルが、トリノでは金メダル2個を含む合計9個を取りました。



クロスカンントリー10kmクラシカル／脇腹を押さえ
苦痛の表情を見せる新田選手
撮影：大石智久

ええ、ソルトレークシティからの4年、チーム一丸となってトリノにかけてきましたからね。選手が滑り終わると、電光掲示板にバツとタイムが出るんです。上位6位の選手までが表示されるようになっているんですが、たいてい上位にくるのはアメリカ、ド

イツ、オーストラリアの選手なんです。それなのに今回は、そこに“Japan”が1人、2人と入ってくる。メダル獲得数もそうですが、上位にこれだけの日本人が入るなんてありえなかったんです。表示されるたびにわーっと歓声が上がって、ドキドキしてうれしくて、本当に楽しかったですね！

これまで選手がミックスゾーン（取材エリア）に来て、成績がふるわず落ち込む姿にどう声をかけようかなんて気を使ってしまっただけのだけど、今回は失敗した選手も堂々とインタビューに答えてくれました。自分のミスについてもきちんと分析していたりと、本当に成長しているなと思いました。

日本チームはなぜここまで成長したのでしょうか？

大きく変わったのは練習環境だと思います。ただがむしやりに練習するのではなく、科学的にトレーニングしたり、フィジカル、メンタル面でもトレーナーがついたり、弱かったメンタル面を強化したりと練習体制が大きく変わりました。練習場所についても、たとえばこれまでアルペンの練習場所が国内にはなく、大会でぶっつけ本番ということもあったのですが、今は長野のスキー場であるていどの練習ができるようになったのです。もちろん、スキーなどは自然が相手のスポーツなので、これで十分という状況はまだまだえられませんが、長野、ソルトレークの時期から比べると大変な進歩だったようです。また、国内で練習できない競技でも、ワールドカップなど国際大会に出場する機会が増えたことで、それが練習にもなっているんです。国際大会に出るために選手やコーチの所属している会社が協力的だったり、少しずつですがスポンサーがついたりしている現状もあります。そういった環境全てが選手に自信を与えたと思います。現地での選手の様子から、今回はそういう気持ちの強さが見てとれました。

逆に、これまでそういった環境が揃っていなかったということが驚きです。

そうですね。でも、良くなったと言っても選手活動を続けるための活動費のほとんどは選手の負担でまかなわれているんです。オリンピック選手でも、日本で活動を続けるには自己負担が大きいことは言われていますが、障害者の競技で日本代表を続けていくためには1人年間約300万円の活動費が選手の負担になります。この現状では、これからも上り調子で続けていけるかというそれは全く厳しい状況です。特に冬の競技は始めるのも続けるのも難しく、障害者クラスの選手の人口は驚くほど少ないんです。今回メダルを獲得した選手はたまたま飛び抜けた才能を持っていたり、チームの環境づくりに対する意識の高い人だったのですが、その次に続く選手が育っていないのが現状です。世界のレベルが高くなっていく中で、次の大会で世界レベルにいけるかどうかは難しいところです。

パラフォートの取材でもそうした選手の活動を知らせています。また、パラリンピックでは海外のライバル選手の活動などを知ることもできます。こうしたパラフォートの活動が、競技環境をレベルアップしていくことに少しでもつながればと考えています。

なるほど。資金面などでも、もっともって援助の手が必要なのでしょうね。

それだけが原因というわけでもないとは思いますが、それが大きいかもしれませんね。とにかく今は、障害者のやるスポーツとして見るのではなく、ひとつのスポーツとして全体的にもっと注目を集めていくことが大事だと思っています。魅力を感じてもらい、認知度や人気が高まることがその先につながっていくのではと思っています。



バイアスロン/優勝、小林深雪とガイドの小林卓司
撮影：大石智久



アイススレッジホッケードイツ戦/上原大祐選手
撮影：吉村もと



アイススレッジホッケースウェーデン戦/バックを奪い合う遠藤隆行選手 撮影：吉村もと

多くの人に楽しさを知ってもらうために 障害者スポーツを伝え続ける

佐々木さんは写真を撮ることはないのですか？

少しは撮りますが、基本的に競技中はプロ（アマチュアも含め、写真専門のスタッフ）におまかせしています。ただニュースを伝えるのではなく良さや面白さを伝えるためには、やはり一定以上のクオリティが必要ですから。今回私は、セストリエールのアルペンスキーの会場で取材をしていたのですが、選手がミックスゾーンに来たときどんな表情をしているか、それはいつも撮っていました。その表情で選手がどんな滑りをしたか、満足しているのかがよくわかるんです。それに、ミックスゾーンは記者席のようなもので基本的にフォトグラファーは来ませんから、ここで撮った写真がゲレンデの中腹やゴール付近で撮っているフォトグラファーの参考にもなると思いました。いろいろなシーンがありますから、できるだけ競技以外のシーンも紹介したいと思っています。いろいろな角度からパラリンピックをみてもらいたいと思います。

では今回の取材を通して、特に印象に残っている出来事はありますか？

そうですね.....ツバルから参加したボランティアのライターが、華やかな開会式を見て空しくなったという記事を書いていました。ツバルは金銭的に苦しい環境にあって、障害を持っている人がスポーツをするなんて夢のような話です。それなのに、トリノではお金を持っているごく一部の人たちが参加している華やかな大会が行われていて、これが障害を持つ全ての人たちのスポーツイベントだと言わなければならない状況に疎外感を感じた。でも、その開会式で両腕のないダンサーが素晴らしいパフォーマンスで踊るのを見たり、各国の選手が聖火を渡し合っているのを見るうちに、この場があるからこそ次のステップへ進むことができる人がいる、それを知らせるためにこの場所があるのだと思い、前向きな気持ちになったというような内容でした。

パラリンピックに出ている人は決して楽な道を歩んでいるわけではなく、大変な努力を重ねた結果そこにいるのでしょうかね。

そうですね。パラリンピックは障害があれば出られるというものではありません。障害を負ってからトレーニングを積んで選手としてトップに立つというプロセスを考えると、もしかしら障害のない人よりも厳しい部分があるかもしれませんね。世界のスポーツイベントを通して、そういった部分、トップに至るまでの部分もできるだけ伝えていけたらいいなと思います。

今後もパラフォートならではの目線で、世界の障害者スポーツを伝えていってください。

はい。オリンピックに比べてまだまだ注目が低いですし、その存在自体を知らない人も多くいます。障害を持つ人自身も、その家族も、スポーツができるんだということを知らない人がいるかもしれません。私が写真で知らない世界を知ることができたように、もっと多くの人に知ってもらいたいし一般のスポーツとなら変わらない楽しさや魅力があるということを写真を通して伝えていきたいです。そして、これを続けていくことが大切だと思っています。



株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン